

## 源氏物語の四季観

——その基底にあるもの——

武原弘

源氏物語の四季・自然が、人間との深い融合調和の關係にあつて、そこに情趣豊かな美的形姿を表象するものであることは、これまで諸先学によつてつとに考説されてきたところである。<sup>(注1)</sup>この物語の諸巻において、季節の推移、折々の自然景物は、作中人物たちの生活や内面心情と切実に対応し、美妙に調和して現前するのがほとんど常態となつており、こうした自然描写のあり方を総じて、景情一致、主客融合の表現態と規定する通説は、まったく妥当とされ得よう。そしてまた、こうした四季・自然と人事との融和の關係が十全に満たされて描かれるのが、六条院四季の町の世界であつたことも、いま想起されるのである。この物語の四季観を考察するに当たつて、先ずはじめに、六条院の四季・自然の形姿について再確認するのが肝要事である。

六条院の四季は、「初音」巻の春から巡りはじめる。

年たちかへる朝の空のけしき、なごりなく濁らぬうららけさには、数ならぬ垣根の内だに、雪間の草若やかに色づきはじめ、いつしかとけしきだつ霞に木の芽もうちけぶり、おのづから入

の心ものびらかに見ゆるかし。

(初音、(3)143頁)

新造成つた六条院がはじめて迎える新春。右の一文は洛中市井の情景を描いているが、春の訪れと共に新しい生命を甦らせる自然とそれに呼応して歓喜の心を広げる人間の様子が生き生きと表現されている。鈴木日出男氏の評言に従えば、「天象景物そのものが一つ一つの生命体として生動し」、「自然と人間の感応しあう固有の世界」<sup>(注2)</sup>である。かくて、六条院春の町は「生ける仏の御国」(右同)さながら、梅も鶯も紫上ほかの女たちも、すべてが祝福に満たされる町である。絢爛たる遊宴の会、春秋の風流を争う贈答などを経ながら、時節はやがて夏へと向かう。

更衣のころ、源氏は養女王鬘(世間には実娘と知らせてある)への恋情を募らせている。分別ざかりの彼が、いまこの危うい懸想にうつつを忘れてとり乱すことはない。が、抑圧された情念の炎は、彼の内なる闇の中で怪しげに燃え続け、あるいは燦る。

御前に、乱れがはしき前裁なども植ゑさせたまはず、撫子の色ととのへたる、唐の、大和の、籬いとなつつかしく結びなして、咲き乱れたる夕映えいみじく見ゆ。

(常夏、(3)136頁)

夏の町の黄昏時の前栽の風景。「咲き乱れたる」撫子は、恋情募らせながら源氏が玉鬘に近づくと、その心象の風景であろう。遠い過去の、およそ地上のものとは思えない夕顔との純愛の思い出が、彼の心内に鮮やかに甦っていたからである。あの灼熱の恋も、同じく夏の黄昏時の薄暮の中に花開きはじまった。

なでしこのとこなつかしき色を見ばもとの垣根を人やたづねむ  
(同、233頁)

六条院の夏が、玉鬘への源氏のあやにくの恋情におしたてられて過ぎるのは、いうまでもなく、彼女が夏の御殿の女主人花散里の西の対に起居している故なのであるが、いまあわせ留意すべき点として、玉鬘を慕う源氏の情念が、亡き夕顔への限らない追懐の想念と深く結びついていることが看過されてはならない。想起される花散里邸での懐旧の思い。

橋の香をなつかしみほととぎす花散る里をたづねてぞとふ

(花散里、(2)156頁)

さて、どこかに頹廢の匂いを漂わせていた夏が終わり、六条院に秋色が深まる。秋好む中宮の御殿の庭は、いま時節の雅趣にいや映える。

中宮の御前に、秋の花を植ゑさせたまへること、常の年より見どころ多く、色種を尽くして、よしある黒木、赤木の籬を結ひませつつ、同じき花の枝ざし、姿、朝夕露の光も世の常ならず、玉とかかやきて、造りわたせる野辺の色を見るに、はた春の山も忘れられて、(下略)

(野分、(3)1263頁)

かかる六条院の景観は、後統の南の御殿の庭前叙景にさらに具象化

され、露光る小萩、あるいは撫子や紫苑、竜胆や朝顔が這いまじるなど、秋の風趣を集め尽くしたものである。ところが、一夜の激しい野分で、風雅の殿堂六条院がおびただしい乱調の世界と化す物語展開は、読者にとつてたしかに意表をつくものではある。吹き荒らされた庭園の描写に、しばしば指摘されるごとく、「枕草子」「野分のまたの日こそ」の章段で清少納言が提示した美意識との類似を読むことは可能であるとして、「野分」巻のこの場面が物語の構想や人物の内面心情といかに深く関わって叙せられているか、その描写の異質性こそが重要なのである。

山の木どもも吹きなびかして、枝ども多く折れ伏したり。草むらはさらにも言はず、檜皮、瓦、所どころの立葩、透垣などやうのものみだりがはし。日のわづかにさし出でたるに、愁へ顔なる庭の露さらきらとして、空はいとすこく霧りわたれるに、(下略)

(野分、(3)1270-1271頁)

これが自然の客観描写でないことを、原田敦子氏は次のように説く。乱れた庭の情景が夕霧の乱れた心情に重なり合い、露が涙を導き出すなど、自然がドラマをはらみつつ夕霧の心理に凝縮してゆき、(中略)野分は夕霧の心象風景となつて、物語の中を吹きぬけたのである。

紫の上を「視姦」(三谷邦明氏)した夕霧の衝撃と惑乱、それに感づいた源氏の動揺など、野分の後の六条院は内なる不穩を萌しつつある。伊藤博氏の考論に従い、これを「物語第二部への胎動」「萌芽」と読み押さえることができる。ただし、それはあくまでも潜在の、可能態としての危機、六条院の円満と秩序がますます破

綻を来しているというわけではない。むしろ、夕霧を従えてそれぞれの町を巡り見舞う源氏が、それぞれの女主人の人柄にふさわしい秋の風趣の回復ぶりを領知するところに、六条院の人と自然の満たされた調和の世界が読者に確認されるのである。

知られるように、物語に六条院の冬が描かれない。野分の秋に次ぐ冬の季節美が、かつて初冬十月に六条院入りし（「少女」巻）、後に「冬の御方」（梅枝、(3)140頁）と呼ばれる明石君の御殿を中心に展叙されるのでなければ、六条院の四季の循環は途絶したことになるか。「御幸」巻の大原野の冬がその補償描写に当たると読むにも、了解はできない。熊谷義隆氏の考説によれば、明石君が冬の季節と結びつけられるのは、「薄雲」巻の母子別離、その後の知性的な自己抑制の生き方との関連からであって、玉鬘十帖六条院物語においては、彼女は

冬に固定されない（中略）、冬的なあり方から春的なあり方への推移を見ることが出来よう。つまり、冬から春の再生へという季節に象徴される。

そのような人物像として捉えられている。「寂寥と悲劇の季節」冬から、「再生のイメージを持つ」春へと明石君像を移すところに、「季節と人物との固定的な関係へのすらし」を見取る氏の読みは正当であろう。ただし、その「すらし」をもたらず物語の論理こそが考察されなくてはならない要点なのであるが、氏説に従えば、それは「長編を支える直線的時間の中」での展開相だとされている。これを肯じつつ、小論は併せて西村亨氏の『王朝びとの四季』中の解説文をも想起する。

秋の収穫が終ると穀物の靈魂が種子の中にもつて、（中略）同じように宗教的な首長がものにもつて威力ある靈魂を身につけるのが「ふゆごもり」であり、それを破って新しい年の訪れを宣言するのが「はる」である。<sup>注7)</sup>

明石君造型がこの「ふゆごもり」「はる」の信仰理念の具象化であると考えられるかどうかは別問題として、六条院戌亥の町で厳しい冬を迎えた彼女が、ひたすらなる自己抑制と卑下とによって春の訪れを待っていたであろうことは、いわば言外の表現の裡におかれていると解すべきであろう。

ひつきようするに、六条院の四季は人と自然の全き調和のうちに、古代的な死と再生の循環律で推移しているものと認められよう。長谷川政春氏の論述に従って、

植物の生命リズムと人事のリズムとの結びつきを根深くもつていた四季への時間意識（中略）すなわち永遠回起する時間の空間化。<sup>注8)</sup>

それが六条院四季の町なのである。あるいは、野村精一氏が説く「コスモロジー」思想を重ね解いて読むこともできる。すなわち、

古代文明における空間支配の思想のパターンの、古代日本における反映、（中略）日本的世界観の特性といっている「自然」と「人間」との集合されたイメージ。<sup>注9)</sup> そのような「宇宙」なのであり、かかる六条院の盟主光源氏は、その完満の宇宙の支配者なのである。

ところで、こうした四季・自然と人事との融合調和を描く表現は、物語において圧倒的かつ一貫的に読まれながら、その深層においてはむしろ相互の離反、乖離が看取される叙述が多い点こそ、いっそう注意されなくてはなるまい。

花の木どもやうやう盛り過ぎて、わづかなる木陰のいと白き庭に薄く霧りわたりたる、そこはかたなく霞みあひて、秋の夜のあはれに多くたちまされり。  
(須磨、(2)―167頁)

右において、春三月の庭前に秋の情趣を味わうかのごとくの源氏の心情が描かれている。それが古来の春秋優劣論にもとづくものであるのはいうまでもないとして、属目の自然景物に非現前の季節美を想念する彼の内面心理とは、場面において著しく理知的観念的といえる。ここでは、源氏の離京別離の悲哀を強調せんがための、物語作者の作為による秋の現前を読むべきなのである。

次も同趣の季節描写例である。

四月ばかりの空は、そこはかとなう心地よげに、一つ色なる四方の梢もをかしう見えわたるを、(中略)一叢薄も頼もしげにひろりて、虫の音添へむ秋思ひやらるるより、いとものあはれに露けて、分け入りたまふ。  
(柏木、(4)―336頁)

初夏の景物を写しとりながら、叙述の赴くところ、「薄」「虫の音」「露」などによって形象されるのは秋の季節美である。柏木の死を悼む人々の愁傷悲歎を叙すに、悲哀の季節秋がとり合わせられるのは諒とするも、現前の季節と人々の心情の不整合はすでに明瞭と解すべきではないか。

属目の自然景物を離れて非現前の季節が人物に想念されるとき、それは必然的に時間の意識のもとにおかれて現象することになる。すなわち、人物の、現在のではない、未来の季節か、過去のそれが想念されるので、季節はいま、人物によって内在化されたと換言されてもよい。この物語で内在化される季節は、過去の時間の意識による場合が圧倒的に多い。

植えし若木の桜ほのかに咲きそめて、空のけしきうららかなるに、よろづのこと思し出でられて、うち泣きたまふをり多かり。  
(須磨、(2)―212頁)

二条院の御前の桜を御覧しても、花の宴のをりなど思し出づ。いずれも、桜花を眺めやりながら、源氏が藤壺との遠く過ぎた愛恋をしみじみと回想する場面の叙述である。

花はみな散りすぎて、なごりかすめる梢の浅緑なる木立、昔、藤の宴したまひし、このころのことなりけりかしと思し出づる。

(若菜上、(4)―82頁)

二十年の歳月を隔てての源氏と朧月夜の再会場面。晩春の桜の梢を媒介として、源氏ははじめて契りを交わした遠い春を思い返している。

いったいこの物語において、作中人物による過去の回想という形式を語りする方法とする文体の特徴は、あまりにも顕著といわなくてはならない。秋山虔氏は、これを

物語世界の過去をここにひき出すことよって過去を照らし

出すとともにそれに強く規定されて、いま書かれていく現在を物語世界の時間の秩序のなかに相対化する独自の精神運動(註10)と論じている。また、神野藤昭夫氏の考説に学んで、

時間の推積が今の光源氏を支え、過去が現在と交響し、過去がさながらの過去とは別の相貌を帯びて現代的に甦生して(註11)く

と了解することもできる。

ここで、小論が特に留意しておきたい要点がある。人物たちの回想のなかにおかれる季節は、外在して循環する四季のいずれかではありえない、異質の季節に変貌しているという点である。いま人物たちは、過ぎ去つては永遠に回帰することのない、一回起的時間を生きている。藤原克己(註12)氏が説く「すべてをのみこんで不可逆に流れ去る(時間)」である。このような(時間)のなかにおかれた季節は、それがどんなに切実に回想されようとも、再び回帰することは決してない。ひつきょう、その季節は、死と再生の循環律を遠く逸脱したものである、その意味において、もはや四季なのではない。清水好子氏の高論のとおり、「若菜」上・下巻の物語の主題と方法が「過去の甦り」「過去の問い直し」(註13)であることを肯じて、いまその論旨を小論にひきつけることが許されるとするならば、物語第二部は、四季から離脱し、あるいはこれを喪失する人間の悲劇を描き進めていくものなのであろう。その終局に近いのが「御法」(註14)。両巻であるので、そこでの季節表現がいかなる様相を見せるものなのか、本文に即して少しく考査してみたい。

三月の十日なれば、花盛りにて、空のけしきなどもうららかに

におもしろく、仏のおはする所のありさま遠からず、(中略)このころとなりては、何ごとにつけても心細くのみ思し知る。明石の御方に、三の宮して聞こえたまへる。

惜しからぬこの身ながらもかぎりとして新尽きなんことの悲しさ (御法、(4)149頁)

いま、春の盛り。花は爛漫空は晴朗、人々の様子もまた輝く明るさのなかにあるも、近い死を予感する紫上の心内だけは深い寂寥に沈んでいる。自身の主権による法会による荘厳さ、華やかさが、逆に彼女の内界の悲哀感を増伸深化させる結果となるのである。

誰も久しくとまるべき世にはあらざなれど、まづ我独り行く方知らずなりなむを思しつづくる、いみじうあはれなり。

(同、498~499頁)

右の「行く方知らず」が、「歌言葉。死の至り着くところが分らない。したがって、往生や救済の確信も持てない絶望的な気持」を表わすとする「全集」(註15)頭注は、まったく至当で、紫上の底知れない、深い絶望と不安は、詠歌によらなくては言い表わせず、同時に、それははるかに越える極限の遠さにあつたのであろう。引用した短い叙述だけでも確認できるが、いま春の自然の明るさと紫上の内面の暗い寂寥は、際立つて対照的である。自然と人間の限りない離反を離を示している。生命の甦りの季節春と融合同化しえないままの紫上に、物語作者は死に逝いて甦ることのない、人間存在における不救済の状況をかたどらうとしているのである。

「幻」巻の季節表現にこそ、そうした自然と人間の乖離状況が最も象徴的、集約的に描きこめられている。紫上の死後、源氏は深い

悲傷悲歎の涙に明け暮れ、翌春を迎える。

春の光を見たまふにつけても、いとどくれまどひたるやうにのみ、御心ひとつは悲しさの改まるべくもあらぬに、外には例のやうに人々参りたまひなどすれど、(中略)

わが宿は花もてはやす人もなしなにか春のたづね来つらん  
(幻、(4)152頁)

明るいはずの新春の陽光さえも、源氏の暗澹たる、悲傷の心を慰めはしない。庭前に空しく咲いている紅梅が、彼の寂寥をいつそう増し加える。やがて三月、咲き誇る桜花がさらに深く紫上追慕の情を募らせる。

夏の花橘は、まして懐旧の景物。故人を偲び恋う源氏の耳に、ほのかにほととぎの鳴き声が聞こえる夜もあり、物思いは尽きない。

なき人をしのぶる宵のむら雨に濡れてや来つる山ほととぎす  
(同、541頁)

悲哀の季節秋になると、源氏の紫上追慕の情いよいよ抑えがたく、涙とともに詠出されるようになる。

前栽の露いとしげく、渡殿の戸よりとほりて見わたさるれば、出でたまひて、

七夕の逢ふ瀬は雲のよそに見てわかれの庭に露ぞおきそふ  
(同、542頁)

右文中の「露」が秋の景物で、源氏の涙を象徴するのは言うをまたない。こうして季節は迅速に過ぎゆき、終焉枯死の冬も半ば、人の世の無常を深く悟った源氏は、いよいよ出家を決意する。

今年をばかくて忍び過ぐしつれば、今はと世を去りたまふべ

きほど近く思しまうくるに、あはれなること尽きせず。

(幻、(4)154頁)

涙とともに身辺整理をする彼に、死が近いのかも知れない。

以上、「幻」巻に叙せられる四季の推移を通して、源氏の悲傷悲歎の一年を追つてみた。生命のリズムを守つて推移循環する四季のなかで、一貫して変らない源氏の愁歎が印象づけられる。小町谷照彦氏は

光源氏の悲哀は一つの固定観念として恒常化してしまつたやうである。それにしても、季節の進行という位置づけだけで前後の脈絡なく挟み込まれているこの贈答の不連続な配置は、それだけで癒されることのない光源氏の肉面における混乱をそのままに示している。(注)

と説く。また、論点は異なる「幻」巻論であるが、後藤祥子氏によると、

女三宮や明石は、季節の運行が停止したことによそえて、源氏との疎外感をあらわにする。悲しみのなかにも、時の移り行きに感応することこそが「折々の物思いを尽す」ことだのに、その回路は閉じられている。(注)

その故に、「幻」巻の舞台は、「ことさらに四季の殿堂のよそおいを凝らした六条院でなく、二条院であり、四季の町の六条院は源氏自らによつて「放擲」されたのだという。春夏秋冬を通して悲傷悲歎する源氏の心情が、明らかに四季の生命のリズムとは不整合不一致の位相にあると読む小論の立場からすれば、氏の論考はまさに正鵠を得たものと肯ぜられるのである。

物語第三部宇治十帖において、四季・自然と人間の相反乖離状況はさらに進行していくと読むことが許されよう。二、三か所の本文について検討し、例証としたい。

秋の末つ方、四季にあててしたまふ御念仏を、この川面は網代の波もこのごろはいとど耳かしがましく静かならぬをとて、かの阿闍梨の住む寺の堂に移ろひたまひて、七日のほど行ひたまふ。(中略) 入りもてゆくまに霧りふたがりて、道も見えぬしげ木の中を分けたまふに、いと荒ましき風の競ひに、ほろほろと落ち乱るる木の葉の露の散りかかるもいと冷ややかに、(下略)

「網代」は、晩秋にふさわしい風物詩。いまそれが「耳かしがましく静かならぬ」と、八宮に退けられる理由は、彼が四季の情趣美など見棄てて精進しなくてはならない人間の生き方をしている、その象徴的な表現と考えることができる。後半部における「霧」「露」にしても、それらが従前からのいわゆる景情一致の描写態によるものであるのは自明として、ここでは「いと荒ましき風」に散って「冷ややか」なのがこれまでとはちがってきている。宇治の自然は、人間に対して必ずしも親和的ではないかのごとくである。

一足飛びに、「早蕨」巻の文章を読んでみることにする。  
 蕨しわかねば、春の光を見たまふにつけても、いかでかくながらへにける月日ならむと、夢のやうにのみおぼえたまふ。行きかふ時々に従ひ、花鳥の色をも音をも、同じ心に起き臥し見つつ、はかなきことをも本末をとりて言ひかはし、(中略)を

かしきこと、あはれなるふしをも、聞き知る人もなきままに、よろづかきくらし、心ひとつをくだきて、(下略)

(早蕨、(5)134頁)

再び『全集』頭注に学ぶならば、「日の光」を「春の光」に変えて、よみがえる季節を際立たせ、大君と死別して月日の経過にさえ気づかぬ中の君の悲歎を語る<sup>(注)</sup>表現である。文中の「光」と「くらし」の対照語にも注意しておきたい。めぐり来た明るい春なのに、それは亡き父八宮や姉大君の生命を甦らせてはくれない、暗い春である。中君は悲歎追慕に明けくれ、いつそ己れの死をさえ願うようになる。続く物語の展開のなかで、やがて中君は上京し、匂宮の二条院に落ち着きはするものの、増し加わる不安と絶望を慰め癒すものはない。前後において季節描写が激減するのを、小論は暗示的と考える。

継起的に語り進められる浮舟物語において、舞台は再び宇治川のほとりに戻される。ここでの季節表現も、やや後退気味ではあるものの、確かな形象をかたどっている。

二月の十日ほどに、内裏に文作らせたまふとて、(中略)雪にはかに降り乱れ、風などはげしければ、御遊びとくやみぬ。(中略)京には、友待つばかり消え残りたる雪、山深く入るままにやや降り埋みたり。常よりもわりなき稀の細道を分けたまふほど、御供の人も泣きぬばかり恐ろしう、(下略)

(浮舟、(6)138~140頁)

春の雪が、宮中での管絃の遊びを中止させるほどの降り方をするのもめずらしい。まして宇治の山里のそれは、「降り埋み」「泣きぬば

かり恐ろし」い様で、人事に抗い、これを威圧する自然だと評されてよい。季節の推移のなかで、雪は雨に変わる。止むことなく降り続く長雨は、春雨でありながら、京都宇治の道行きをと絶えさせるほどの激しさである。折から、増水した宇治川の流れが音高い。

この水の音の恐ろしげに響き行くと、「かからぬ流れもありかし。世に似ず荒ましき所に、年月を過ぐしたまふを、(中略)君は、「さてもわが身行く方も知らずなりなば、(下略)

(同、159頁)

浮舟を死へと誘う宇治川の水音は、まさしく三田村雅子氏のいう「不協和音としての自然」<sup>(註18)</sup>を象徴するものであろう。四季・自然が有する死と再生の循環律から離反して、そこに違和、不協和の音を生じる。それに聞き入る浮舟の行く先は、おのずから死でなくてはならない。入水後、蘇生した浮舟が異形の死としての出家を切願するのは、霧深い小野の山里の秋、松籟の響きが寂しい夜であった。四季は確実に循環する。精進ひたすらの浮舟にも春はめぐり来るが、年も返りぬ。春のしるしも見えず、凍りわたれる水の音せぬさへ心細くて、(中略)

かきくらす野山の雪をながめてもふりにしことぞ今日も悲しき  
(手習、(6)132頁)

なおやはり生命の甦りの春なのではない。彼女が喪失し、その回復を願っているのは、記憶ではなく、めぐる四季の一つとしての春だったのである。「夢浮橋」巻末部で、最後の季節表現は、夏の景物畫に依つてなされている。闇のなかに明滅する光を凝視する浮舟の眼は、ただちに物語作者自身のそれなのでもあろう。

少い例証の不備を、重松信弘氏の考論を拝借して補いたい。

山が深く、川がすさまじく、霧の深い宇治の地には、須磨・明石の海上を眺めて心をやるような、やさしいあわれと通う何物もない。(中略)宇治の自然はあわれ的な心には不協和であり、これを甘受するのは超あわれ的な心である。(中略)現世的あわれを拒否させたり、水死を誘ったりする宇治の自然は、全く特異なものであり、このほかの非あわれ的自然はこれほどきびしいものではない。<sup>(註19)</sup>

#### 四

以上の若干の分析と考察を通して、小論が旨とするところのまとめを得たい。

源氏物語の季節表現は、基本的には自然と人間の融合調和、あわれの美を追求してなされるもので、その最も典型的なあり方として六条院四季の町の描写を見ることができた。ここは、循環する四季の死と再生のリズムが人間のそれとの全き調和を保つ、まさしく完満の小コスモスである。しかし、物語はその基底に、その完満を徐々に自壊へと導く、もう一つの内在律をもっていた。物語世界を流れる「内的時間」のなかに転移した四季・自然が、過ぎ去つては永久に帰らない無常のそれへと、いちはやい変質変貌を遂げる。そこは、死からの甦生を見るを得ない人間存在のいや増す絶望と不安が、四季を通じてついに癒されることのない世界。「幻」巻の方法とはその世界の描出のためのみであった。

いかにも救済の難い人間存在の絶望と不安。その行き着くところ

死からの再生はまったくあり得ないのか？物語作者は、この重く深い自問に対して自答すべく、さらに第三部へと語り継ぐ。が、見てきたごとく、そこでもまた四季・自然と人間の乖離はいっそう大きく、生命の再生の春は、光のない、暗いものだった。やがて夏、深い闇間にかすかに明滅する螢の光が見えるだけである。

小論は、そこに、この物語作者の人間不救済の思想を読みとる。

ただし、その深い絶望のなかにも、いかにも幽かにはあるが、救済の光がほの見えていたのではないか。いや、光を見出そうとして、己れの全存在をかけて凝視を続けたのではないか。

秋山虔氏の論考に従うと、この物語における自然と人間の表象のあり方とは、

自然からの人間の離脱、いかえれば人間のなかに自然を確保し、自然に人間がいだかれて上代的な精神状況の崩壊への、切実な対応として編みだされたところの、もつとも固有に平安時代的なそれであった。

という。さらに氏は、

そのことが、逆に自然、季節の推移によって象徴される人間の生命や運命の流転の空しさを語ることになる。

とも論及する。小論が追求すべく設けた課題は、つとに氏の高論に究められていることを存知しつつも、いささかの本文追読を試みた次第である。学ぶところの大きさにもかかわらず、考察の不十分さを覚える小論ではある。さらなる学びへの自戒の稿とする。

注(1)森岡常夫『源氏物語の研究』(昭23、弘文堂)、上坂信男『源氏

源氏物語の四季観

——その基底にあるもの——

物語―その心象序説―(昭49、笹間書院)など、他に同趣旨の論著を多く見る。

(2)鈴木日出男『源氏物語歳時記』(平1、筑摩書房)

(3)原田敦子『野分の美』(講座源氏物語の世界)第五集、昭56、有斐閣)

(4)三谷邦明『夕霧垣間見』(注(3)の書に所収)

(5)伊藤博『野分』の後―源氏物語第二部への胎動―(『文学』

昭和42・8、『源氏物語の原点』昭55、明治書院刊所収)

(6)熊谷義隆『源氏物語の四季』(『源氏物語講座』5、平3、勉誠

社刊所収)

(7)西村亨『王朝びとの四季』(昭54、講談社学術文庫)

(8)長谷川政春『物語・時間・儀礼』(『日本文学』昭52・11)

(9)野村精一『六条院の四季の町』(講座源氏物語の世界)第五集、

昭56、有斐閣刊所収)

(10)秋山虔『外的時間と内的時間』(『国文学』昭45・5、)

(11)神野藤昭夫『源氏物語の時間表現』(『国文学』昭52・1)

(12)藤原克己『時間』(秋山虔編『源氏物語事典』平1、学燈社刊

所収)

(13)清水好子『源氏物語の主題と方法―若菜上・下巻について―』

(紫式部学会編『源氏物語研究と資料』昭44、武蔵野書院刊所収)

(14)阿部秋生 秋山虔 今井源衛 鈴木日出男校注・訳『源氏物語』

小学館刊。

(15)小町谷照彦『源氏物語の歌ことば表現』(昭59、東京大学出版

会刊所収)

(16) 後藤祥子「源氏物語の四季―『幻』巻の六条院再説―」(「むら  
さき」24、昭62・7)

(17) 注(14)の書による。

(18) 三田村雅子『源氏物語―物語空間を読む』(平9、ちくま新書)

(19) 重松信弘『源氏物語のころ』(平2、佼成出版社刊)

(20) 秋山虔『王朝女流文学の世界』(昭47、東京大学出版会刊)

なお、本文の引用は、右注(14)の書によった。その(6)以外は「新編」  
によった。